

J.S.ミル『経済学原理』における

分配・交換峻別論について

諸 泉 俊 介

On the Dichotomy between Distribution and Exchange in J.S.Mill's *Principles*

Shunsuke MOROIZUMI

1. 問題の所在

J.S.ミル (John Stuart Mill、以下、ミルと略記)『経済学原理』¹ (以下での引用は、*Mill Pr.*と略記)の大きな特徴は生産論と分配論との峻別であるが、もう一つ見逃せないのは分配・交換の二分法、すなわち分配論と交換論とを分離し、分配論を交換論の前に位置づけることである。ミルは、『原理』第三篇交換論の劈頭において言う。「(交換の)問題は、経済学においては極めて重要かつ異彩を放つ位置を占めているので、経済学者の中には、交換問題の枠組みが、経済科学それ自身の枠組みをなすと理解している者もある。…(しかし)経済学の性格に関するこの見解は、余りにも狭いものである…。経済学の二大部門である富の生産と富の分配のなかで、価値の考察が関与しなければならないのはただ後者のみであり、しかもそれは、仕来りや慣習ではなくて、競争が分配を行う要因となっている場合だけである。…今日のような産業活動の制度の下でさえも、すなわち色々な職業が細分化され、生産に携わるあらゆる人々の報酬がある特定の商品の価格に依存しているような状態の下でさえも、交換は生産物の

分配についての基底的な法則ではなく、…単に、分配を実行するための機構の一部であるに過ぎない」(*Mill Pr.*, p.456)。

ミルは、第二篇の分配論では、「生産物の分配を規制する法則を、…価値と価格の機構からは独立して論じ」(*ibid.*, p.429)、第三篇交換論では、「分配が交換と貨幣との複雑な機構を通じて行われる場合にも、分配の法則がなお引き続いて作用するかどうか」(*ibid.*, p.695)を追究する。こうした結果、分配論では、例えば賃銀利潤相反関係を用いた利潤論が実物的に説かれ、他方交換論では、交換価値が相対的なものとされ、絶対価値説的な労働価値説は否定され、また不変の価値尺度も否定されている。従って、分配論と交換論とに関するミルの取り扱いは、先行する古典派経済学、殊にリカードとは明らかに異なったものとなっている²。

ミルの分配・交換論の取り扱いを巡っては、リカードとの継承関係という点から、近年議論が積み重ねられてきた³。例えば、「ミルのリカーデ

¹ Mill, J. S., *Principles of Political Economy, with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 1848.

² 確かにJ.ミルの『経済学綱要』は、生産、分配、交換、消費という論理構成を採っているが、分配論の中核を成す賃銀利潤相反関係論に関してはリカードと同様であり、実質的にはミルの論理構成とは異なっている。

³ こうした諸議論の批判と検討については、馬渡尚憲『J.S.ミルの経済学』、237-240頁を参照のこと。

「ミアニズムの深さ」を強調するホランダーは、こうしたミルにおける分配論と交換論との特異な取り扱い方法を無視し、リカードウとミルとは共に分配・交換の同時決定論を採ったとして、リカードウ＝ミル連続説を主張する⁴。ホランダーの見解には、シュムペーターやブラウグおよび馬渡から批判がなされているが、馬渡は、リカードウとミルとの錯綜した継承関係を摘出して、次のように言う。

「リカードウ＝ミル関係としては、ミルの分配論は、価値論なしに実物的にリカードウ的な命題を論証しており、結論的には『リカードウの真意』にそうリカーディアニズムに立つものであったが、それにもかからわずあるいはそれだからこそ価値論では多くの点でむしろリカードウから離れ非リカードウ的であった」⁵。

そこで問題となるのは、ミルが分配論と交換論とを峻別する理由である。馬渡と同様に分配と交換との論理的分離を認めるブラウグは、この峻別の理由を、両者を同時決定する「一般均衡理論の発展以前に著述した経済学者が絶えず陥る落とし穴」であり、ミルは「問題を認めていたが、それを解決する分析道具をもっていなかった」ことに求めている⁶。これに対して馬渡は、ブラウグを、「分配と交換とは、本来その同時決定的な一般均衡的關係しかありえないという前提でミルを論じることが、予断にすぎる」⁷と批判する。その上で馬渡はこの理由を、ミルの価値論が、「分配論における賃銀利潤相反関係命題の証明を担う任務から解放されて、いわば身軽になって、市場の均衡的な価格メカニズムの解明に腐心できるようになった」⁸とところに求める。

馬渡の研究は、ミルの分配・交換峻別論の特質を見事に析出しており、再論の余地もないようにも思える。しかし、細かい点では、多少の疑問なしとはしない。その一つは、ミルが、分配論と交

換論とを峻別した意味である。馬渡は言う。

「ミルは、賃銀利潤相反を穀物比例説の系譜で実物的に説こうとして、また賃銀利潤相反だけでなく地代論も賃銀論も実物的に説けるということで、分配論を価値論から分離して先行させた」⁹。ミルの分配論が実物的に説かれていることを、リカードウやマルサスの『原理』とは異なるミル経済学の特質として摘出する点に異論はないが、しかし、「実物的に説ける」から「分配論を価値論から分離して先行させた」というのでは、ミルが分配論を交換論に先行して置く意味は必ずしも明瞭ではない¹⁰。ではミルは、何故あえて分配論を実物的に説いたのか、また、ミルは、分配論を交換論から分離したのか、それとも交換論を分配論から分離したのか、こうした問題を改めて問う意味があるように思われる。以下では、ミルの利潤論に焦点を合せて、この問題を考えることにする。

2. ミルとリカードウの接点

ミルがJ.ミル（James Mill、以下では父ミルと略記）の手によって、経済学分野においてはリカードウの後継者として教育されたことはミルの『自伝』¹¹（以下での引用はAb.と略記）に詳しい。父ミルは13歳のミルに、当時出版されたばかりのリカードウの『原理』を「一種の連続講義で教え始め」（Ab.,p.31）て、毎日その内容をミルに報告させた。また、この父子の学習の成果である父ミルの『経済学綱要』（1821年）の仕上げに際しては、欄外見出しの作成や内容の抜き書きなどを

⁴ 馬渡、同上書、237頁。

⁵ 馬渡、同上書、163頁。

¹⁰ ミルは、分配論の「資本の利潤について」の章の最後に、こう述べている。

「これらの（利潤に関する）命題の論証は、吾々の問題のこの段階では、決定的であって欲しいと願いつつも、一般的な形で述べるより他に致し方ない。吾々が『価値』および『価格』の理論を考察した後、具体的な姿における利潤の法則を、すなわち、利潤の法則が作用する諸種の事情の複雑な錯綜における法則を、闡明することが出来るようになったならば、この証明はもっと十分に、もっと大きな力を以て、与えられるに違いない」（Mill Pr.,p.366）。

¹¹ Mill, J. S., *Autobiography*, 1873.

⁴ Hollander, S., *The Economics of John Stuart Mill*, p.245.

⁵ 馬渡、同上書、237頁。

⁶ Blaug, M., *Economic Theory in retrospect*, p.174.

⁷ 馬渡、前掲書、161頁

手伝わせている (*ibid.*, p.65)。さらに初期のミルは、例えば論文「マルサスの価値尺度論」(1823年)や「クォーターレヴューの経済学」(1825年)などで、リカードウ経済学を祖述し、感情的とも思える筆勢で、リカードウを擁護している。しかしミルは、1826年秋頃の「精神の危機」以降、父ミルやリカードウの批判の上に、独自の思想を形成するようになる。経済学に関しては、十数人の同学の仲間とともにグロート邸を借り受けて経済学の研究会を開催し、父ミルの『経済学綱要』、リカードウの『原理』、さらにはベリーの『価値論』などを読破する (*ibid.*, p.123)。この研究会の成果が、1829-30年に執筆された『試論集』¹² (以下の引用ではEs.と略記)に結実する。『試論集』は、公刊されることなく永らく行李の底に仕舞われていたが、1844年になって初めて日の目を見た。1848年に公刊されるミル『原理』は1845年の秋に執筆が開始されている (*ibid.*, p.243) から、『試論集』の内容は『原理』に直結すると思われる。

さて、この『試論集』第四論文「利潤および利子について」¹³において、ミルは「労働の生産力」と「資本の生産力」という概念を駆使して、リカードウ利潤論に迫ろうとする。すなわちミルは言う。

利潤は「資本家がその資本を回収した後で彼の手に残る剰余」だから、利潤の適切な理論としては、「利潤は資本の生産力 (productive power of capital) に依存する」というのが自然であるように思われるが、しかしそれは「人を誤らせる表現」である (Es., p.290)。何故なら、「資本は、厳密に言えば、何ら生産力を有して」おらず、唯一の生産力は、「道具によって助けられ原料に働きかける」、「労働の生産力 (productive power of labour)」だからである (*ibid.*)。

ミルは、資本家が支配できる現実の生産力は、「労働の生産力が一定であっても、例えば賃銀が

騰貴するならば、…同一の資本はより少ない生産の労働しか動かせないから、より少ない利潤しか生まない」ことになると言うのである (*ibid.*, p.291)。

しかし他方でミルは、「吾々は、資本の生産力という表現を完全に排除する必要はない」のであり、利潤が、「資本家が自分の資本を用いて支配し得る現実の生産力の量を意味するに過ぎないことを十分に銘記」していればよい (*ibid.*)、と言う。すなわちミルは、「人を誤らせる」と批判した「資本の生産力」に依存する利潤をも決して放棄しない。ミルは、外観は外観としての意味があるというのである。

注意すべきは、ミルのこの論文において、『原理』に引き継がれる穀物比例説的な利潤論が登場することである。しかしこれに対して、ミルが対象とするリカードウの利潤論は複雑である。リカードウは、確かに初期の著作『穀物の低価格が資本の利潤に及ぼす影響についての試論』¹⁴ (以下では『利潤論』と略す。また引用はPft.と略記)においては、ミルに類似した穀物比例説的な利潤の説明を行った。しかしこの利潤論理は、リカードウ『原理』においては随所に分断され、まとまった形では見出せなくなる。だとすればミルは、リカードウが『原理』の奥に仕舞いこんだ理論を再度掘り起こし、自らの利潤理論にとり込んだことになる。こうしたことを行うミルの意図は何であらうか。リカードウの利潤論を概観しよう。

3. リカードウの利潤論

(1) 『利潤論』における理論

リカードウは『利潤論』において、穀物タームで農業利潤を確定し、それを基に商工業利潤を捉えるという方法をとった。農業利潤についてリカードウは、地代が存在しない状態、すなわち全剰余＝全利潤を想定して、次のように言う。

Economy, pp.290ff..

¹⁴ Ricardo, D., *An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock, shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation*, 1815.

¹² Mill, J. S., *Essays of Some Unsettled Questions of Political Economy*, 1844.

¹³ Mill, J. S., On Profits, and Interest, in *Essays of Some Unsettled Questions of Political*

「ある人の資本が小麦200クォーターの価値のものであり、半分は建物、器具等々のような固定資本、他の半分は流動資本からなっているとして、もしも固定資本と流動資本を回収した後に残る生産物の価値が¹⁵、小麦100クォーターあるいは小麦100クォーターと等しい価値であれば、資本の所有者に対する純利潤は50パーセントあるいは200の資本に対する100の利潤となる」(Pft.,p.10)。

このリカードウの説明は、穀物量に着目すれば、スラッフアが言うように、「穀物という同一の商品が資本と生産物との双方を形成しており、従って総生産物と前払いされた資本との間の差額による利潤の決定…は、価値評価の問題とは何ら係わりなく、直接に穀物の分量でこれを行うことが出来る」(Ricardo, *Principles*, p.xxxi、以下の引用ではR.Pr.と略記) という穀物比例説である。しかしリカードウは、小麦の量と同時に、「それに等しい価値」と言う。これに基づけば、リカードウの論理は、小麦を投入と産出双方の価値尺度としたものであることになる。すなわち、中村が指摘するように、「投下資本の中のなかばが物質的同質性をもたない固定資本からなるからこそ、あえてリカードウは、小麦を価値尺度として投下資本の価値を小麦量によって表示」¹⁶するのである。リカードウは、農業においてすら、生産には穀物とは異質の固定資本が必要であるから投下資本が資本の回収後に取得する利潤は価値を以って測定せねばならないことを十分に意識しておりながら、それにも拘わらず、この価値を小麦という投入と産出とを直接比較できるものに還元している。その意図は、前払いされた資本の価値と生産され売却された商品の価値との差額が利潤をなすという資本の観点からする利潤概念の裏に、そうした利潤の発生する社会的・究極的根拠が、穀物の需給関係でもなく、資本の希少性でもなく、一定量の穀物が一定量の固定資本と流動資本とを用

いて生産される関係にあることを強調するところにある¹⁶。ミルの観点からすれば、リカードウには確かに労働の生産力に基づく利潤の考え方が存在する。

さて、次にリカードウは、資本と人口との増加によって劣等地が耕作に引き入れられ、「同一量の生産物を得るために、より多くの資本(事例では小麦10クォーターの価値の追加)を永続的に使用する必要が¹⁷」(Pft.,p.13) 出来するという想定から、利潤の低下を導出する。生産物である小麦300クォーターは、以前には200クォーターの小麦を投入して生産できたが、今では210クォーターを要する。そうすれば、利潤は以前の100クォーターから今では90クォーターへ、利潤率は50パーセントから43パーセントへと低下している。すなわちリカードウは、「地味の劣った土地、あるいはより不便な位置にある土地が順次耕作に引き入れられることによって、地代は既耕地においては上昇し、それと同じ程度に、利潤は低下する」(ibid.,p.14) と言うのである。リカードウでは、農業利潤の低下は、「穀物生産の困難」を原因として生じるが、この原因は「生産費用の増加」と同義であるものとして説明されている(ibid.,p.18)。

そこで次の問題は、耕境における農業利潤が如何にして商工業利潤を、それゆえ一般的利潤を規制するかである¹⁷。リカードウは、「農業資本に

タームで利潤を考えるリカードウに対し「生産においては、如何なる場合にも、生産物が前払いされた資本と全く同じ性質のものであることはありません、…土地から生じる特殊な利潤を決めるのは、資本の状態、言い換えると資本の一般的利潤と貨幣の利子なのであって…」(The Works and Correspondence of David Ricardo, Vol.VI,p.117)と批判を行った。これに対してリカードウは、「個人は物質的生産を以って彼等の利潤を評価しませんが、国民はいつでも必ずそうします」(ibid.,p.121)と反論している。

¹⁷ スラッフアは、初期リカードウ利潤論の特徴が「農業者の利潤がその他のすべての産業の利潤を規制する」という命題にあると言う(R.Pr.,p.xxxi)。またタッカーは、「この問題が実物タームで考えられた場合には、他のすべての産業部門の利潤率は農業の利潤率で規制されるのだと仮定することが必要であった」(Tucker, *Progress and Profits*,pp.103-4)と述べる。この点については、羽鳥卓也『古典派経済学の基本問題』(未来社、1972年)第四章を参照のこと。

¹⁵ 中村廣治『リカードウ体系』121頁。

¹⁶ 『利潤論』公刊の前提をなす段階でのリカードウとマルサスとの書簡による論争において、マルサスは、穀物

対する利潤率が仮定によって50パーセントであるとすれば、統べての他の資本の利潤も、…50パーセントであろう」と述べ、この章句に註を付して、「農業資本の利潤は、製造業や商業に投下された利潤にも、同様の変動を起こすことなくしては、実質的に変動し得ない」(ibid., p.12, footnote)と言う。この同じ変動とは、農業部門で起きる劣等地耕作に要する生産費の変化であろう。リカードウは、商工業部門でも、農業と同様の生産費の変動が起きると考える。すなわち、彼の論理はこうである。

「統べての商品の交換価値は、その生産の困難さが増加するにつれて上昇する」が、「もし、金・銀、服地、リネン等々の生産にはより多くの労働が要求されないのに、穀物の生産においてはより多くの労働を必要とするために新しい困難が生じるならば、穀物の交換価値は、それらのものに比較して上昇する」。それ故、「農業あるいは製造業に何らの改良も起こらない」として、「富の増進」すなわち劣等地耕作の進展が起これば、原生産物以外の「統べての商品をその本来の価格に留めておき、原生産物と労働の価格だけを騰貴させ」るが、これは諸産業部門の生産費の上昇を意味するから、「賃銀の一般的上昇の結果、一般的利潤は低下」する(ibid., p.20)。ミルの観点からすれば、ここでのリカードウの理論は、資本がどれだけの量の労働生産力を支配しうるかという、資本の生産力に基づく利潤の把握になっている。

かくして『利潤論』のリカードウは、穀物を価値尺度として農業利潤を導出し、その変動が賃銀の一般的上昇を生み出すことで他の生産部門に生ずる「生産の困難」＝「生産費の増加」から、一般的利潤の低下傾向を説いた。ミルの視点からすれば、リカードウでは、労働生産力を基礎とした農業利潤が、生産費の変化を介して、資本の生産力として現れる一般的利潤を規制するのであり、したがって、労働の生産力に基づく利潤の説明と資本の生産力に基づく利潤の説明とは、同義と看做されているのである。

(2) マルサスのリカードウ批判

この生産力の問題を巡っては、マルサスが『利潤論』公刊直後に、書簡において、次のように批判した。

「資本の利潤は、以前に想定されていたように量と競争に左右されるのではなく、生産の容易に左右されるという新しいお考えには、ますます同意できないことが判ってきます。…ある国の土壌が非常に肥沃で…60倍もの収穫を生み出すほどであったとしても、なおかつ資本の利潤は6パーセントに過ぎない…こともありえましょう。／私には貴方が勤労の生産性(productiveness)と資本の生産性との間の非常に重要な区別を看過されているように思われます。この二つは、実は非常に違ったものであつて、必ずしも一緒に動くとは限りません。…一国の土壌は10倍も生産するほど肥沃であり、もう一方の国の土壌は8倍しか生産しないほどであつても、なおかつ後者の国で使用する資本は、穀物への需要がより多く、また相対価値がより高いため、より高い利潤をもたらすことがしばしばおこるということは間違いありません。／貴方が生産の困難とか容易さとかについて話される際には、勤労のことを言っておられるのですか、それとも資本のことを言っておられるのですか。資本のことであれば、生産の困難とか容易さとかは、勿論、低い利潤あるいは高い利潤と同義でなければならず、吾々の間の相違は言葉の相違に過ぎません。勤労あるいは労働のことであれば、相違は実質的なものであり、この問題を私が貴方と同じ観点で見ようになることはまづないでしょう」(The Works and Correspondence of David Ricardo, Vol. VI, pp.289-92)。

これに対してリカードウは、「私は、生産の容易さと言う言葉で、土地の生産性だけを考えるつもりはなく、土地の自然の肥沃度と結合された熟練、機械および労働」(ibid., p.292)を考えていると、マルサスが発した、生産の容易さは資本のものなのか労働のものなのかという疑問に答えた。リカードウのこの答えは、彼が、生産の容易さや困難さを労働の生産性に係わるものと捉えて

いることを伺わせる。しかし、リカードは、マルサスから寄せられた疑念の所在を十分に理解しているとは言いがたい。リカードは、続けて言う。

「貴方が重要だとお考えになる勤勞の生産性と資本の生産性との間の区別を、私は明確に理解できません。労働を節約する機械はすべて労働の生産性を増大させますが、それはまた資本の生産性を増大させます」(ibid.,p.294)。

マルサスとリカードとの間の生産性を巡る論争は、1815年末まで平行線を辿ったまま続くのであるが、マルサスの労働と資本の生産性の違いについての考えが、彼の『経済学原理』¹⁸における二つの利潤原因、すなわち「土地における生産の難易」(第一の原因)と「資本の分量の、それが使用する労働の分量に対する比例の変動」(第二の原因)との区別(Malthus *Principles*., pp294-5)へと引き継がれて行くことは言う間でもない。勿論、マルサスが捉える資本の生産性は、資本の多寡ではなく、資本に対する需要の多寡によるものであり、ミルの捉えるそれとは異なるが、この生産性を巡る問題が、リカード亡き後のミルのマルサス批判における大きな争点になって行く。

(3) リカード『原理』における利潤論

さて、『利潤論』における利潤の説明の際にリカードが導入した穀物価値尺度が大きな問題を孕み、結局彼は、『利潤論』での穀物比例説を揚棄して、『経済学原理』¹⁹の利潤論へと進まねばならなかったことは、周知のところである。『原理』における利潤論は、まとまった叙述としては第六章「利潤について」で与えられるが、『利潤論』に鑑みれば、その論理は、第一章から第七章に至る理論篇の各所に分散配置されている。利潤の問題に限って言えば、リカードは、第一章の

価値論において、諸商品の「比較価値は、夫々に実現された労働量によって左右されるのであって、生産量の如何、あるいは一般的賃銀または一般的利潤の高低如何には係わらない」(R.Pr.,p.26)ことを明らかにした後で、「賃銀として支払われるであろう割合は、利潤の問題にとっては重要であり、「利潤が高いか低いかは、賃銀が低い か 高いかに正確に比例する」(ibid.,p.27)という一般利潤の規制原理を提示する。『利潤論』で明示的に示されていた労働の生産力に基づく利潤＝剰余の存在証明は、価値論の中に埋め込まれるに到っている。確かに、第二章の地代論では、穀物比例説的に農業利潤が説明されている。リカードは言う。

「第一等、第二等、第三等の土地が、資本と労働の相等しい分量を使用して、純生産物100、90、および80クォーターの穀物を産出するものと仮定しよう。人口に比較して肥沃な土地が豊富に存在し、それ故、第一等地を耕作することが必要であるに過ぎない新しい国においては、純生産物はすべて耕作者に帰属し、そして彼が前払いする資本の利潤となるであろう…」(ibid,pp.70-1)。

しかし、地代論においては、価値論で導出された一般的利潤の存在が前提され、農業における利潤は、地代と分け合う「純生産物」として把握されている。『原理』では、『利潤論』とは異なり、農業利潤が一般的利潤の存在を証明する役割から解放されているのである。

第四章「自然価格と市場価格」においては、利潤は正に、労働の生産力に基づいて、生産に必要なものを超える剰余として捉えられ、それが競争の中で、資本の生産力に基づく利潤に一致するものとして捉えられている。すなわち、こう言う。「競争こそが、諸商品の生産に必要な労働に対する賃銀、および使用される資本をその本来の能率状態に置くのに要する他のすべての経費、を支払った後に残る価値、すなわち利潤 (overplus) が、各事業において、使用された資本の価値に比例するように、諸商品の交換価値を調整する」(ibid.,p.91)。

¹⁸ Malthus, T. R., *Principles of Political Economy, considered with a view to their practical application*, 1820.

¹⁹ Ricardo, D., *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, 1817.

以上の議論を踏まえてリカードウは、第六章「利潤について」において、「利潤の永続的変動…の原因は何か」(ibid.,p.110)を考察する。その論理は、こうである。諸商品価値は投下労働量によって規制され、穀物の交換価値は最劣等地における投下労働量によって規制される、従って最劣等地の農業資本も製造業資本も地代を支払わないのであるから、「彼等の商品の全価値は二つの部分に分割されるのみであり、一つは資本の利潤を、他は労働の賃銀を構成する」、そしてここから、「利潤は、賃銀が低いか高いかにより比例して高いか低いかであろう、…賃銀が穀物の騰貴と共に上昇すれば、…利潤は必然的に低下する」(ibid., pp.110-11)という相反関係命題が出てくる。

(4) 固定資本問題

ミルの観点から見て、『利潤論』にあった労働の生産力に基づく利潤と資本の生産力に基づく利潤との同義視は、『原理』においても同様である。このような思考に基づいて打ち出されたリカードウの利潤論であるが、しかしそこには、周知のように、大きな問題が伏在していた。固定資本、すなわち蓄積された過去の労働の問題である。

現実的な資本の観点からすれば、各個別諸資本が流動資本と固定資本との構成比率を異にすることは当然である。ここに賃銀率の変化とそれに応じて決定される一般利潤率とを導入すれば、生産に必要な費用は、この構成比率に応じて影響を受けざるをえない。この場合、リカードウが相反関係命題を導出する前提とした、「労働の相対量がもたらす諸商品の相対価値を決定する」(ibid.,p.20)ことに固執すれば、それぞれの資本にはそれぞれ異なる利潤率が与えられざるをえない。この難問に逢着したリカードウは、投下労働量による相対価値決定原理の修正としてこの問題を回避した。逆に言えばリカードウは、相反命題を、資本の構成比率が同じであり、また固定資本の耐用期間や回転速度が一定であるという前提の下に措いたのである。

しかし、こうしたリカードウの利潤論は、ミル

にとっては問題ありと見たはずである。何故なら、ミルの観点からすれば、利潤を根本的に規定する生産力は、「道具によって助けられ原料に働きかける」労働の生産力であり、固定資本を含む生産手段の問題を回避しては、そもそも成り立たない理論であり、またこの点は、リカードウにおいても、少なくとも『利潤論』においては、強く意識されていたからである。ここに、ミルがリカードウを批判する一つの視角を見出さう。

4. ミルのリカードウ批判と再編

(1) 『試論集』におけるミルの利潤論

ミルが論文「利潤および利子について」の冒頭で、「労働の生産力」に基づく利潤と「資本の生産力」に基づく利潤との概念的相違を指摘していることはすでに述べた。その上でミルは、利潤を次のように把握する。

「差し当たり、道具や原材料を考察の対象からはずして、生産を専ら労働の成果と考えよう。ある国において、各労働者の賃銀は年間1クォーターの小麦に等しく、100人が1年間に120クォーターの小麦を生産出来ると仮定しよう。この場合、労働に対して支払われる価格と、その労働の生産物との割合は100対120であり、利潤は20パーセントである」(Es.,p.292)。

労働が100クォーターの小麦を消費しつつ120クォーターの小麦を生産するという、労働の生産力に基づく利潤の説明である。ミルの場合、道具や原材料を外すので価値尺度は不要となるが、その点を除けば、『利潤論』におけるリカードウが踏襲されている²⁰。そこで対象から外した道具や原材料が問題となるが、ミルは、「道具や原料は、…本来労働以外の如何なる費用もかかっていない」ことを根拠に、これらを労働に還元する(ibid.p.293)。

このような処理を施した上で、ミルは、「労働が生産の唯一の要件」であると同時に、「資本を回収することは、使用された賃銀を回収すること」であるから、「労働の賃銀とその労働の生産物

との割合が利潤になる」のであり、こうして「利潤は賃銀に依存」し、「賃銀が騰貴するとき利潤は低下する、というリカードウ氏の原理」(ibid.,p.293)に到達する。ミルは労働を賃銀と読みかえ、さらにこの賃銀を「賃銀の生産費」、すなわち「1日の労働の賃銀を生産するために必要な労働時間数」(ibid.,p.294)と解釈し直すことで、リカードウの利潤命題を、労働の生産力に基づく利潤として再定式化する。ここにミルは、リカードウの真意を見るのである。

(2) 「リカードウ氏の不完全性」

だが、こうしたリカードウの利潤論には、マルサス等からの批判がある。ミルもまた、リカードウの利潤論は「不完全である」という。すなわち、「道具、原料、建物は、…それら自体が労働の生産物であり、その限りで生産の経費の中に数えることができる。だがそれでも、それらの価値の全部がそれらを生産した労働者の賃銀に分解するわけではない」。「従って、賃銀を回収した後で資本家の手元に残っている一切のものが、彼の利潤を形成するというのは正しくない。資本にとって総収入は賃銀か利潤かであるというのは正しい。しかし、利潤は出費を回収した後の剰余を形成するだけでなく、出費そのもののなかにも入りこんでいる」。それ故、「リカードウ氏の理論は不完全である。利潤率は彼が言う意味での賃銀の価値、つまり労働の賃銀を生産物として生産する労働の量に専ら依存するわけではないし、利潤率は相対賃銀、つまり労働者たちが全生産物の中から全体として受け取る割合…に専ら依存するのではない」(ibid.,pp.295-7)。

ミルは、リカードウ利潤論の不完全性を示すために、次のような「簡単な事例」を設定する。

「(最初に) 60人の農業労働者が、賃銀として60クォーターの穀物を受け取り、さらに60クォーターの価値に等しい固定資本と種子とを消費し、彼等の作業の結果180クォーターの生産物が作られたとしよう。種子と道具の価値をその要素に分解すれば、それらは40人の労働の生産物であることがわかる。何故なら、この40人の賃銀は、上に仮定した率(50パーセント)の利潤と合せて60クォーターになっているからである。だから、180クォーターの生産物は100人の労働の所産である。

「次に極端な事例として、ある工夫が発明されたために、…同一量の生産物が、固定資本の助けを全く借りずに…獲得できるが、しかしそのためには、種子と固定資本を生産するのと同数の追加的労働者の雇用が必要であり、従って節約されるのは前段階の資本家の利潤のみであると仮定しよう。」

「(そうすれば) 利潤率は明かに騰貴している。それは50パーセントから80パーセントへと増大している。…／ここには利潤率の疑う余地のない騰貴が起こっている」(ibid.,p.296)。

ミルが示すリカードウの不完全性は、すなわちこうである。個別の資本を考えれば、そこには必ず、固定資本を含む生産手段が存在しなければならない。各資本は産業間で、また工程間で相互に関連し合っているから、先行資本の利潤は生産要素として経費に入る。そこで、仮に資本家が、先行資本の生産物のうち利潤部分だけを節約し、生産を内部化して、その分、同量の労働を用いるならば、生産に用いられた労働量も、労働が生産物の中から受ける報酬である賃銀の価値も不変であるにも拘わらず、資本家の利潤は変化する。注意すべきは、ここでは生産量や賃銀の価値と同様に、

²⁰ ミルが、『試論集』執筆以前にリカードウの『利潤論』を読んだかどうかは、甚だ疑問である。ミルの初期の論文「地代の性質、起源および昂進」(Mill, J. S., The Nature, Origin, and Progress of Rent, 1828, in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. IV, p.161ff.)においてミルは、差額地代論の発見者としてウエスト、マルサスとともにリカードウの名を挙げながら、リカードウの著作を、マルサス『地代論』

(Malthus, T. R., *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated*, 1815, in *The Works of Thomas Robert Malthus*, Vol. VII, p.111ff.)の二年後に出版された『原理』と取り違えている(Mill, *op.cit.*, p.179)。しかし、ミルの『原理』は、明かに『利潤論』を読んで書かれており、出版の年次も、マルサス『地代論』と同年と記されている(Mill, *op.cit.*, p.419)。

利潤の総量も変わっていないことである。変化は、節約された先行資本家の利潤が今度は節約した資本家の利潤に加わっているところに起こっている。表で示せば次のようになる。

	賃銀	生産手段	利潤	生産物
事例 1	60	40(w)+20(p)	60	180
事例 2	60+40	—	80	180
	賃銀の価値	賃銀の生産費	利潤率	
事例 1	10/18	12/18	50%	
事例 2	10/18	10/18	80%	

ミルが衝いている「リカードウの不完全性」は如何なることを含意しているのであろうか。ミルが指摘しているのは、リカードウが諸商品価値の規定に取り込んだ「労働を実行するのに要する器具または機械に投下された労働」(R.Pr.,p.24)の問題、すなわち「直接的労働」に対する「蓄積された労働」の問題である。勿論、生産物が両者の比率に応じて分割される利潤と賃銀との分割比率が、両者を加えた投下労働量によって規定される価値に影響を及ぼすことはない。なぜなら利潤の高低は全資本に「平等に作用する」(ibid.)からである。しかし、リカードウが認めるように、厳密に投下労働量に依るならば、現実の利潤は「資本の耐久性が不等であること」や「回収される速度が不等であること」によって影響を被ることになる(ibid.,p.38)。したがって、先にも述べたように、リカードウの相反関係命題は、固定資本の耐久性や資本の回収速度が全資本で同じという前提を設けたうえでのみ、成り立つものである。換言すればリカードウは、社会のある経済的發展段階において一定の直接的労働と蓄積された労働との構成が与えられた場合に、生産物の価値と賃銀の価値との関連からでてくる利潤の存在根拠を、労働の生産性という観点から明らかにしているのである。しかし、ミルの目からすれば、リカードウが言うように、利潤の本質は社会の労働の生産力によって本質的に規定されるとしても、現実的に投資を促し資本蓄積を推し進める利潤は、

諸資本の生産物交換のなかで、資本の有する生産力としてのみ、すなわち前払いに対する回収としてのみ現れるのであり、この資本の観点から捉えられた利潤は、計算方法も、実際の大きさも異なりうるということになる。ミルは、リカードウが当然一致するはずと考える労働の生産力に基づく利潤と資本の生産力に基づく利潤とが乖離する可能性のあることを示唆するのである。

しかしミルは、リカードウの利潤論が孕むこの論理的難点を、彼が「賃銀」に置き換えた「賃銀の生産費」を以って修正を施す。すなわち、資本家による先行利潤の節約は、資本の生産力の上昇ではあるが、しかしそれは同時に経費の節約であり、ミルの例で言えば、穀物1クォーターの生産費は10/18から12/18へと低下している。賃銀は相変わらず従来と同一の労働量の生産物であるにもかかわらず、穀物の生産費は低下したのであるから、それはすなわち、「賃銀の生産費」の低下を意味する、とミルは言うのである。かくしてミルは、「利潤率は賃銀の生産費に依存する」という命題を、「究極的原理」として提示した(Es.,p.299)。

ミルは、リカードウの相反命題をこのように修正して、労働の生産力に基づく利潤と資本の生産力に基づく利潤との論理的整合性をとろうとした。その意味では、ミルはリカードウの真意を受け継いだと言える。しかし、このように論理的な整合性をとったとしても、二つの利潤様式に乖離が生ずる現実的可能性が否定されたわけではないであろう。何らかの原因で、資本が節約＝貯蓄²¹によって生産過程の改良を捉えれば、労働の生産力に変化がなくても、資本の生産力として現れる利潤は変化するからである。

²¹ ミルは、利潤の取得権限の一つに利子を挙げ、この権限をN.W.シーニアの制欲説によって説明するが、同時にミルは、シーニアが制欲を生産の要素とする点を批判して、制欲を節約＝貯蓄(saving)によって置きかえる(Mill, J. S., Note on N. W. Senior's Political Economy, p.135)。

(3) ミル『原理』における利潤論

以上のような『試論集』における利潤の考えが、論点を整理されて、『原理』第二篇第15章「利潤について」に引き継がれる。『原理』の利潤論は利潤権限論と利潤原因論とに分かれている。利潤権限論においては、ミルは利潤を、利子、保険料および監督賃銀に分けて、その取得権限および利潤の最低限度の存在について述べ、さらにこれに基づいて、個別的利潤の差異や一般的均等化傾向を検討する。これに対して利潤原因論においては、ミルは、「どのような原因が利潤の大きさを決定するか」(Mill *Pr.*, p.410)を問うが、杉原が明かにしたように²²、ミルは、利潤分量の大小を論じるに先だって、利潤そのものの存在可能性を「利潤起源論」として論じている²³。馬渡がミルの「穀物比例説」と特徴づけた論理が展開されているのは、この利潤起源論においてである。すなわち言う。

利潤は、「交換における付随的な事柄から生まれるのではなくて、労働の生産力 (productive power of labour) から生まれる」ものであり、「その国の労働生産力が、交換が行われていると否とに拘わらず、創り出すものである」。それ故、交換によって利潤として入手する「貨幣は、彼が利潤を取得する原因ではなく、彼の利潤が支払われる様式に過ぎない」(ibid., p.411)。

ここには「利潤および利子について」と同様の、労働の生産力に基づく利潤と資本の生産力に基づく利潤との、二様の利潤の区別を見て取れよう。

では利潤の真の起源は何か。ミルは言う。「利潤が生まれる原因は、労働者が自己の維持に必要なとする以上のものを創り出すこと」、農業であれば、「人間が、食糧を育成している間に、道具の製作やその他必要とされる一切の準備に従事する時間を含めて、自分たちを養うために必要とする以上の食糧を生産することが出来ること」、

あるいは「形を変えて言えば」、「食糧や衣服や原料や道具が、それらを生産するのに必要とされる時間よりも、より長い時間永らえさせる (last longer) ということ」である (ibid., p.411)。

ミルは利潤の起源を、労働者の自己維持に必要なものの以上に生産された剰余であると捉える。ミルの利潤は、個別的な利潤ではなく、社会総体としての剰余である。ミルは、農業を例にとりて、利潤の起源を具体化している。しかしこれは説明のための一つの事例であって、ミルの捉える利潤は、「一国の統べての資本家に利潤として分けられる総額」(ibid., p.413)である。この農業の例に示されている論理は、食糧の育成および生産諸手段の製作や準備に要する時間、すなわち労働の維持に必要なとされる時間を合計して、その時間を、その間に労働(者)が消費する食糧の量に換算し、それをこの時間に生産された食糧の量と比較するというものである。そこで「形を変えて」なされた説明では、労働時間が比較の手段となっている。この文章では「last longer」の意味内容が判りづらいが、これを人間の生命・活動を永らえさせると取れば、言われている意味は、食糧や衣服や原料や道具といった再生産に必要なとされる生産諸手段が、それらが生産される時間よりも長く、生産者を生存させる、ということであろう。ミルは、馬渡が「農業モデルであり穀物モデル」²⁴と言う穀物比例説的な利潤の説明を例示として示しながら、まずは、労働の生産力に基づく利潤＝社会的剰余を導出するのである²⁵。

こうした利潤に対して、ミルはさらに通常の意味での利潤とは何かを問い、次のように言う。

利潤とは、「もしも資本家が、生産物を取得するという条件で労働者を扶養しようと企てたとして、この資本家が、彼が行った前貸しを回収した

²² 杉原四郎『イギリス経済思想史：J.S.ミルを中心として』(未来社、1873年) 103頁以下を参照のこと。

²³ この利潤起源論は、『原理』第四版(1857年)に書き加えられた。

²⁴ 馬渡、前掲書、203頁。

²⁵ ミルはこの考えを、リカードウから引き継いでいるように思われる。通説では、「古典学派の利潤論、とくにその最高の理論といわれるリカードウの利潤論においては、利潤原因論がほとんどすべてであって、利潤起源論は見られない」(杉原、前掲書、104頁)と書かれてきた。しかし、前節で論じたように、リカードウにおける利潤起源論は、『利潤論』においては明示的に、『原理』においては暗示的に示されている。

後に、彼のために残された生産物の一定部分を取得する」ものであり、また、「資本家がこれら（生産手段）を一群の労働者に、労働者が生産した一切のものを取得するという条件で提供するとすれば、労働者たちが、彼等自身の必要物や道具を再生産することに加えて、その労働時間の一部を資本家のために働くべく残す」（*ibid.*, p.411）ものである。

ミルは、労働の生産力から生み出される社会的剰余が、資本関係という特定の生産様式に媒介されてはじめて、利潤という特殊な所得範疇になると言う。ここに、ミルの分配論における歴史意識が伺えるが、ここでミルが見ているのは、資本の生産力に基づく利潤の側面である。『原理』においてミルが打ち出す労働の生産力と資本の生産力との二面的な利潤把握は、利潤の本質をその特殊歴史的な規定性との対比で、整理され深化されている。

そこでミルは、資本関係を前提に、利潤の大小を決定する様式の考察、すなわち利潤原因論へと進む。現実的な資本関係、すなわち「資本家が、労働者の報酬の統べてを含む、経費の全体を前払い」（*ibid.*, p.411）する関係の中では、この前払いを超える「超過分が前払いされた金額に対して有する比率」（*ibid.*, p.412）が利潤率として現れる。それ故、超過分を所与と考えれば、利潤の大小はこの前払いの内容によって決まる。

ミルは、この前払いから地代を外す。「吾々が今検討しているこの問題では、地代を無視しても、それから事実上誤りが生じることはない」（*ibid.*, p.412）。リカードウの議論によって、地代が利潤と共に剰余をなし、一般的利潤を論ずる際には、地代を無視しても構わないことを、ミルは承知しているからである。さらにミルは、『試論集』と同様に、生産手段を統べて「労働の賃銀」に還元する。すなわちミルは、「各資本家の支出の大部分は、直接的な賃金支払いから成り立っている」し、それ以外の「材料や道具は、労働によって生産されたものである」から、この資本家は「先行する資本家が支払った賃銀を払い戻してい

る」ことになる、と言うのである（*ibid.*, p.412）。

(4) 『試論集』と『原理』

しかし、『試論集』の踏襲はここまでであり、『原理』では、新しい観点が導入されている。それは「利潤および利子について」において取り上げられていた「リカードウの不十分性」すなわち先行資本家の利潤の問題であり、リカードウ利潤論に刺さった棘である固定資本に絡む問題である。ミルは言う。

「吾々が仮定している資本家は、ある単一の事業を代表するのではなく、国全体の生産的産業を代表するという形態を成しているもの」であり、「彼はその道具を自ら作り、材料を自ら整える」（*ibid.*, p.412）。

ミルは、資本家を、他の資本家と売買関係に入らない、全体的資本であると想定して、『試論集』における先行資本の利潤の問題を封殺するのである。

その上でミルは、資本家の利潤を左右する要因が、「生産物の大きさ、換言すれば労働の生産力」と、「労働者たちの報酬がその生産量に対してとる比率」（*ibid.*, p.413）であると言う。この二つの要因のうちで、利潤の率に関するのは第二の要因である生産物と労働者の報酬との割合である。ミルは、この労働者の報酬を、「労働が資本家に要費する」ものとしての「労務費（cost of labour）」と規定し、「利潤は労務費に依存する」という、ミルが「リカードウの真意」と見る相反命題に到達するのである（*ibid.*, p.413）。

『原理』における利潤論は、基本的には『試論集』における利潤論を踏襲したものである。しかし、『原理』では、『試論集』において摘出されていた「リカードウの難点」が取り除かれており、従って、そこに織り込まれていた労働の生産力に基づく利潤と資本の生産力に基づく利潤との乖離の可能性も消去されている。それは、行論から明らかなように、資本を社会的・全体的資本と想定し、諸資本間の交換を封殺することによって可能となるものであった。『試論集』の正式な題名は

「経済学における未決問題」であるが、ミルは、『試論集』においてはリカードウの利潤論のなかに労働の生産力に基づく利潤と資本の生産力に基づく利潤との間に存在する「未決問題」を発見したのであるが、しかし『原理』では、この問題の所在は行間の裏に退き、ミル自身の論理の一部へと消化されているのである。ここには、分配論を「価値と価格とからは独立に」論ずるという制約を課する、『原理』構成上の特徴が反映されているように思われる。それ故、ミルにおける利潤論＝分配論と交換論との関係を理解する上では、ミルの資本把握が鍵となる。

5. 結びに代えて：ミルの「遊休資本」把握

ミルが第三篇「交換論」に任せた特殊な経済状態は、「各人の生活が、大部分、自分自身が参加して生産した物ではなく、その後に購買を伴う販売という、二重の交換によって入手する物によって行われる」(ibid.,p.456)、というものである。すなわち交換論においてミルは、購買と販売との間に銀行や手形割引業者が介在して信用を供与し、従って購買と販売とが必ずしも一致しないという貨幣・信用社会を想定している。こうした、購買と販売との分離が資本に及ぼす影響については、ミルが『試論集』の段階から強調していた。

ミルは、上で取り扱った第四論文に先立つ第二論文「生産に及ぼす消費の影響について」²⁶において、「遊休資本」の存在を指摘していた。すなわち、
「ある国の資本のうち、極めて大きな部分が常に遊んでいる。ある年の年々の生産物は、すべての資源が再生産に捧げられた場合、簡単に言えば国の一切の資本が十分に使用された場合の生産物に、大きさにおいて近いものでは決してない。」
「資本の一大部分が恒久的に使用されずにいるということは、吾々が分業に対して支払う価格であ

る。この買い物は値段だけの値打ちを持っているが、しかし決して安いものではない」(Es.,pp.267-8)。

すなわちミルは、社会における資本はその一部が常に遊休しており、そうした遊休資本の存在を前提としたまま、再生産は均衡するというのである²⁷。

こうしたミルに固有の資本把握は、『原理』にも受け継がれている。ミルは『原理』第一篇生産論の「資本について」において、次のように言う。「資本は例えば売れ残りの商品や、まだ投資口を見出さない資金の場合のように、一時的に使用されないことがあって、このような期間には、この資本は少しも勤労を動かさない」(Mill Pr.,p.65)。資本に関するこうした考えが、第二編の「利潤について」では、「当面使用されてない資本は、数多くの信用の水路を通して、水準の比較的低くなっているところへ多量に流れ込むことで、利潤均等化の手段となっている」(ibid.,p.407)と、現実的な利潤の変動に結び付けられている。しかし『原理』では、こうした遊休資本は、逆にいえば、資本の生産力として現れる現実的な利潤を定める、機能資本の量的規定とその動向は、交換・貨幣・信用を展開する第三篇交換論に委ねられているのである。

以上、利潤論を中心としてミル分配論の内容を検討してきた。ミルの利潤論では、労働の生産力に基づく利潤が根底に据えられていた。それは、一国の資本が受け取る利潤の総体であり、社会の再生産と発展との基礎条件をなすものとして、交換に係わりなく実物的に成立するものとして捉えられていた。しかし同時にミルは、資本関係という特殊な生産様式においては、この社会成立の基礎条件が、現実的な利潤と乖離する可能性も指摘していた。こうした事実をミルは、リカードウの利潤論から学び、摘出し、分配論と交換論へと分けて位置付けたのである。それ故ミルの交換論は、分配論を分離して先行させたものではなく、逆に

²⁶ Mill, J. S., On the Influence of Consumption on Production, in *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*, op.cit.,pp.262ff.

²⁷ この点はヒックスが指摘している。Hicks, J., From Classical to Post-Classical,p.62.

分配論から分離されて後方に置かれたものと考え
ることができよう。

了

引用文献一覧

Mill, J. S. [1873]1981. *Autobiography, in The Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. I, Routledge.

邦訳、『ミル自伝』岩波文庫、1960年。

— [1848]1965. *Principles of Political Economy, with Some of Their Applications to Social Philosophy, in Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. II-III, Routledge.

邦訳『経済学原理』岩波文庫、1959-63年。

— [1844]1967. *Essays of Some Unsettled Questions of Political Economy, in Collected Works of Stuart Mill*, Vol. IV, Routledge.

邦訳『経済試論集』、『J.S.ミル初期著作集4』

御茶の水書房、1997年、所収。

— 1945. Note on N. W. Senior's Political Economy, ed. By F. A. Hayek, *Economica*, vol. XII.

Ricardo, D. [1817]1951. *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, 3rd ed., in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. I, Cambridge U.P..

邦訳『経済学および課税の原理』、

『デイヴィッド・リカード全集 第1巻』

雄松堂書店、1972年。

— [1815]1951. *An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock, shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation, in The Works and Correspondence of David Ricardo*, Vol. IV, Cambridge U.P..

邦訳『穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論』、『デイヴィッド・リカード全集 第IV巻』雄松堂書店、1970年、所収。

Malthus, T. R. [1820]1989. *Principles of Political*

Economy, considered with a view to their practical application, Variorum Ed., 2 vols., Cambridge U.P..

邦訳『経済学原理』(上下)1968年。

— [1815]1986. *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated*, 1815, in *The Works of Thomas Robert Malthus*, Vol. VII, Pickering.

Hollander, S. 1985. *The Economics of John Stuart Mill*, 2 vols., Blackwell.

Blaug, M. 1996. *Economic Theory in retrospect*, 5th ed., Cambridge U.P..

Tucker, G.S.L. 1960. *Progress and Profits in British Economic Thought 1650~1850*, Cambridge U.P..

Hicks, J. 1983. From Classical to Post-Classical: The Work of J. S. Mill, in *Classics and Modern, Collected Essays on Economic Theory* III, Oxford.

杉原四郎、1873年。『イギリス経済思想史：J.S. ミルを中心として』未来社。

馬渡尚憲、1997年。『J.S.ミルの経済学』御茶の水書房。

羽鳥卓也、1972年。『古典派経済学の基本問題』未来社。

中村廣治、1975年。『リカードウ体系』ミネルヴァ書房。